

# Sの掛け声

遠藤 静江

担任して四年。四年から五年になる  
とき、組み替えをしたが、また同じク  
ラスになったS。

Sは小児ぜんそくで、学校を休むこ  
とも度々であった。季節の移り変わり  
には、必ずといってよいほど発作を起  
こし、顔色も悪く、気の毒であった。

学習のほうも、三年生のころは、さ  
ほど苦労せずついでにこられた。しかし  
一日登校しては数日休む。数日たつて  
登校したSの顔を見て、もう大丈夫だ  
ろうと思っていると、突然欠席の知ら  
せがある。このような状態で高学年に  
なった今、なかなか追いつかせるのに  
苦労する。体が弱いということ、両親  
も私も、きつくしかることもできな  
いまま悩んでいた。

人なつこく、休み時間に手品をやっ  
て見せたりして、みんなを笑わせてい  
るSを眺めながら私は、どうか素直な  
気持ちを持ち続け、強い子になつてく  
れと、心の中で祈るのだった。

夏休みをあと数日に控えたある日、  
小学校生活最後の思い出として、雄国  
沼へハイキングをしよう、という話が持  
ち上がった。夏休みの一日を、親子で  
楽しむ行事に、私も心から賛成した。

次の日、子供たちにそれを話すと、子  
供たちは、

「山登りだから、修学旅行のときより  
食べものをいっぱい持っていこう」

「帽子は、登山帽がいいな」  
と、もう目を輝かせている。しかし、  
子供の喜びを見ながら、私自身、登れ  
るかなと心配になってきた。

恥ずかしいことながら、登山の経験  
が一度もない私であったからだ。それ  
から数日たち、いよいよハイキングの  
朝を迎えた。

さわやかな校庭は、次々と登山姿の  
父母と子供たちが集ってきてにぎやか  
になった。Sもジーパンをはき、首に  
手ぬぐいを巻き、母と並んで立ってい  
た。

二、三日前まで発作を起こし、出席  
できるかどうか心配していたのが、う  
そのように見えるほど晴れ晴れした顔  
をしていた。

猫魔岳の細いささやぶの一本道に長  
い列が続く。山一つ越して、次の山  
の頂上にたどりつく度に、子供たちの  
歓声がこだまする。前の方を見ると、  
男の子たちは、もう最後の山を登って  
いる。

かなり急だ。吐く息も荒くなつてく  
る。掛け声をかけながら峯を登りつめ  
ほっとした一瞬、立ちすくんでしまっ  
た。目の前の道はふさがれ、綱一本だ  
けがぶらさがっているだけである。

「一人ずつ、綱をしっかりとぎって登  
ろう」と登り始める。すると  
「みんな、大丈夫だよ。先生が登った  
んだから」元気なO子の声に、みんな  
の顔がほころんだ。

綱につかまって登り、しばらく歩くと、  
とうとうたどり着いた。  
冷たい風に吹かれながら、おにぎり  
をむさぼり食った。

帰路についたときだった。来た道を  
もう一度：と思うだけで自信がなかつ  
た。ささの葉の間を通り抜け、顔を上  
げただけでもう足が進まない。

「先生、もうだめだ。休もう」と草む  
らに腰を降ろす子。  
そのとき、私の手に太い枯れ枝が一  
本差し出された。Sである。そして、  
ぐいぐい手を引いてくれる。あの弱々し

いSのどこに、こんな力が隠されてい  
たのだろう。

「おれ、四年間心配ばかりかけていた  
からな」とポツポツ独り言を言いなが  
ら。Sを心配して追いかけて来た母親  
に、

「母ちゃん、大丈夫かい」  
と、空いているほうの手を差し出す。  
心配して付き添った母親だったが、  
反対に励まされ、うれしさを隠しきれ  
ないようだった。

素直な子、強い子になつて欲しいと  
願っていただけに、谷川を流れる清水  
のような美しい心を発見した日であつ  
た。

また、Sの掛け声で、初めての登山  
をすばらしい思い出の一つにした一日  
でもあった。  
(河沼郡河東村立河東第一小学校教諭)

## 教育随想

ふれあい

